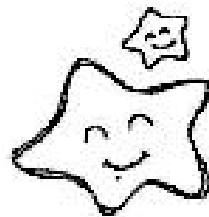


QSK にぬふあぶし

No.314

ね
子の方向の星(北極星)



チャンスはピンチの顔をしてやって来る! ~さよなら はぴわん~

2015年8月に開所した「地域活動支援センターはぴわん」(宜野湾市普天間)が、2023年3月で終了し、約8年の歴史を閉じることになった。宜野湾市の委託事業(地域活動支援センターI型事業)が、2月に行われた公募選定の結果、2023年度4月より「沖福連」から「医療法人タピック」へ運営団体が変わり、「地域活動支援センタータピック」として新たにスタートする。

7年8ヶ月という期間を「はぴわん」の名称で活動してきたコンセプト(基本的な考え方)は、「安心して失敗できる 人がつながる場所」である。

地域活動支援センターI型事業に「精神保健福祉士」を配置する理由は、旧法(精神保健福祉法)で設定された「精神障害者地域生活支援センター」の機能(憩いの場+相談支援)を、障害者総合支援法においても継続し、精神科病院での長期入院者が「退院した地域でその人らしく暮らすこと」を実践するためである。

※「精神障害者地域生活支援センター」は、「障害者自立支援法(2006年)」より「地域活動支援センターI型事業」として名称変更と共に、市町村の裁量事業として、現在の「障害者総合支援法」の中にも設定された。



地域を歩きながら、ごみを拾う宜野湾市地域活動支援センター「はぴわん」の関係者(9日) 宜野湾市普天間

そもそも「その人らしく」とは何だろうか? 「あなたらしさ」とは何ですか? さらに「あなたらしく生きるとは何ですか?」との質問に答えられるだろうか? 「人は、他者を通して自分を知る」という言葉に心当たりがある方は多いのではないか? つまり「あなたらしさ」を知るには、「あなたの周りの人とのつながりの数」だけ「あなた」を知る機会を得るとのこと。憩いの場所を利用する人が、さまざまな人と出会い、つながり、時には思いがけないトラブルから「ストレスという名のおみやげ」を受け取り、その

しさを

「おみやげ」を大切な人たちにお裾分けすることで「新たな あなたらしさ」に気づいていく。「ストレス」が「人生をより良く生きるきっかけ(おみやげ)」となるコツは、「モヤモヤする気持ち」を「音(言葉)」にすること。「モヤモヤの音(辛い気持ちを言葉にする)」は、聴いてくれる人が存在しないと口にする事ができない。「安心して失敗できる 人とつながる場所」のイメージは、このような想いから誕生した。ところが、地域活動支援センターは市町村事業(地域生活支援事業)のため、その街に暮らす住民しか利用できないルールが設定されている。言い方を変えると「人のつながりを限定する場」である。特に地域活動支援センターI型事業については、精神的な課題を有する方の利用割合が高い。そもそも精神疾患は、私の体験も含めて見えてきたことは、「**人とのつながりなおしを目的にした病**」ではないか? という気づきであるが、残念ながら現在の「地活の憩いの場」については、「人のつながりを限定した憩いの場」になりやすい。旧法の精神障害者地域生活支援センターの憩いの場は、どこの市町村からも利用可能な街中の公園や図書館のような存在でもあったはずだ。

精神疾患の症状と呼ばれる状態は、自分自身ではどうにもならない状態(人につながらざるを得ない状態)となり、医療保健福祉の支援者を入り口にさまざまな人につながり、「**精神疾患を発症したことをきっかけに自分らしくなる**」という「**命の防衛反応**」であると考える。

「障害は環境がつくる」との定義から、車椅子ユーザーなどの身体障害者の障壁が、段差の多い環境であるように、精神障害者の障壁は「**精神疾患への偏見・差別**」が多い社会そのものである。「精神疾患者を精神障害者に変える異常な社会」を変える活動について「はぴわん」という特別な空間がなくなることを「**発展解消**」と表現し、「**チャンスはピンチの顔をしてやって来る**」の視点を大事にして、新たに活動していきたい。最後にこの場を借りて、はぴわんの空間で時間を過ごした方へ質問させて下さい。「あなたらしさとは何ですか?」(兼濱克弥)



最後の「感謝のごみ拾い」をしながらかりの小学生たちに手伝ってもらったはぴわんの利用者たち=9日、宜野湾市内

2023年3月17日

ながら続けてきた地域のこみ拾い活動もこの日で終わり。宜野湾市普天間の精神障がい者地域活動支援センター「はぴわん」の利用者たちが「最後の清掃」をしたのは先週だった▼市の委託で運営してきたはぴわんは8年弱にわたり精神障がいのある人たちの生活の場だった。下校時間にごみ拾いをするが児童と言葉を交わしたり、こども食堂を開いたり、利用者との交流も模索してきた▼施設長で精神保健福祉士の兼濱克弥さんの夢は「地域活動支援センターの発展的解消」という。精神障がいのある人の活動拠点がなくても、地域の中に居場所があれば、必要なくなるのが理由だ▼今月末ではぴわんを閉じる兼濱さんは、活動の場を公民館などに変え、地域住民と精神障がい者が関わる取り組みを始める。物事が終わる、始まる春。新たな挑戦に飛び込む▼仮装した利用者のごみ拾いを見て、小学生が楽しそうに話し掛けていた。手伝いを申し出る子もいた。地域の中で支え合い、共に生きる光景は続いていくはずだ。

金口木舌

月に1度、仮装を楽しみながら続けてきた地域のこみ拾い活動もこの日で終わり。宜野湾市普天間の精神障がい者地域活動支援センター「はぴわん」の利用者たちが「最後の清掃」をしたのは先週だった▼市の委託で運営してきたはぴわんは8年弱にわたり精神障がいのある人たちの生活の場だった。下校時間にごみ拾いをするが児童と言葉を交わしたり、こども食堂を開いたり、利用者との交流も模索してきた▼施設長で精神保健福祉士の兼濱克弥さんの夢は「地域活動支援センターの発展的解消」という。精神障がいのある人の活動拠点がなくても、地域の中に居場所があれば、必要なくなるのが理由だ▼今月末ではぴわんを閉じる兼濱さんは、活動の場を公民館などに変え、地域住民と精神障がい者が関わる取り組みを始める。物事が終わる、始まる春。新たな挑戦に飛び込む▼仮装した利用者のごみ拾いを見て、小学生が楽しそうに話し掛けていた。手伝いを申し出る子もいた。地域の中で支え合い、共に生きる光景は続いていくはずだ。

ダニウス・プラス来沖シンポジウム参加報告 〈後編〉

くろいわ みはえ
黒岩 海映(弁護士)

(※前号からの続きです)

1月21日シンポジウム 【場所】教育福祉会館

解離性障害で入退院を繰り返し、身体拘束を受けた辛い経験を、なかむらなつみさんが語ってくれた。バリバラ「国連勧告を受けて(1)精神医療」にも登場された当事者。お気持ちや状況が素直に伝わってきて、身体拘束や強制ということの誤りが誰にも伝わる共感できるお話だった。辛くて入院した時、身体拘束ではなく何が欲しかったかという質問に対し、温かい手や対話や存在がほしかったという言葉はとても心に響くものがあった。また、過去に暴れた時、家族に木に縛り付けてほしかったという発言について、家族に迷惑をかけている自分が嫌で、そのように思ったという。身体拘束を否定しながら、そんな思いを持った理由を聞かれて、「選択肢」がなかったというお話も大変わかりやすく、精神障害のある人々がいかに選択肢のない中で“強制”の世界へ追い込まれているのか、ストレートに理解できた。

司会進行の兼濱克弥さん(宜野湾市地域活動支援センター「はぴわん」施設長)は、支援者であり当事者でもあるとのことで、10代の頃、発症して暴れた時の家族の顔を今でも辛く思い出すと語りながら、思わず涙ぐんでおられた。なつみさん同様、暴れてしまったりする方が、ご自分自身で最も傷付いているという現実をリアルに伝えて下さった。また再発したくなくてこの業界で働くようになり、これまで再発を恐れて生きてきたが、精神疾患とは命を守るために起きるものと理解できるようになったというお話は、とても深く印象に残った。

池原弁護士からは、なかむらさんから兼濱さんからも、どうにもならない症状で家族に迷惑をかけてしまい、そして迷惑をかけてしまったこと自体で深く傷付く当事者の心境が語られたことを取り上げ、日本では迷惑をかけてはいけないという縛りや同調圧力が強すぎる、もっと迷惑をかけてもいいんだ、お互い様だ、迷惑をかけ合おうという社会になっていかないと、精神障害のある人々の生きづらさは解消されて行かないというお話がなされた。

親川志奈子さん(沖縄大学非常勤講師・琉球民族独立総合研究学会共同代表)からは、沖縄が様々な犠牲を強いられてきた歴史に触れ、沖縄独自の言語「ウチナーグチ」の保存を研究してこられた中で、ハワイに留学して勇気づけられ、イギリスに留学してスコットランドの人から、「なぜ独立を言わないの?!」と鼓舞されて、現在の活動に至っているとお話が興味深かった。

自己決定権を奪われている精神障害のある人々と、自己決定権を奪われている沖縄の現状を重ね合わせた今回のシンポジウムのテーマは大変意義深く、多くを考えさせら

れ、大きな課題を与えられる機会となった。



1月22日 普天間基地PFAS汚染見学

米軍基地から泡消火剤などが放出され、排水溝から基地外に出て、PFAS(有機フッ素化合物)が周辺の土や水を汚染していることが、昨年来、大問題となっている。

普天間第二小学校のグラウンドの土の汚染がひどく、また古くから地域住民が使ってきた湧き水まで汚染され、基準値の40倍の数値が出ているという。地下水まで汚染されている現実に震撼する。

米軍基地はこれについて、実態調査すらさせてくれない。なぜ何もかもやりたい放題なのか、憤りだけが残った。



最後にダニウスさんが、リトアニアは第二次世界大戦前はドイツ、大戦後はロシアに支配され、ようやく独立できたのが1992年だった、沖縄とリトアニアには共通点があることがよくわかったと挨拶された。〈了〉

リモート版『家族による家族学習会』を終えて

おあしすコール 島袋 照美

2022年度みんなねっと家族学習会・企画委員会の中で、5グループがリモート版『家族による家族学習会』を実施することになりました。

私たちCグループでは、参加者を沖縄の家族だけに限定して開催することとなり、その準備が5月から始まりました。まずは担当者を沖縄在住の4名に決めて、沖福連にはズーム(リモート会議アプリ)のアカウントの利用依頼。参加者募集の案内が、7月配布の「にぬふあぶし」や沖福連のホームページにも掲載されて、参加者の申し込みを待つことに。

しかしながら、申込者が来ない。リモート版なのに、スピード感がない。



すでに他の4グループは2週間で参加者が決まったとのこと。そこで、募集先の地域を広げて再募集したらどうか。担当者にも沖縄以外の方を入れたらどうか、モチベーションが下がらないか等々の意見も出て、どうする? 気持ちは焦る。

事前準備会を開き、担当者となる方々に聞いてみることにする。やはり県内限定の方向で行きたい。せめて参加者が3名でもいればできるし、学習会終了後にリモートでのつどいがしたいという意見が出ました。それでは広報を広げようと、各自分担で、新聞社・保健所・保健相談センター等、考えられるあらゆる方面に、広告・案内をすることにしました。そして新聞広告からの問い合わせが2件。いずれも検討するとの言葉をいただくも、その後は返事が来ません。ガックリ! また、クリニックからの案内を受けた方の問い合わせがあったものの、パソコンやスマホがない方でした。

それから沖福連の理事の方々に、家族を紹介していただきたいと電話をかけたところ、そちらの会長ご自身が参加をしたいとお返事をいただけてとても喜びました。それから、相談を受けたご家族へも参加を促し、これで学習会を開催できる人数に。最後に新聞広告からも1人申込者が増えて、計6名。

ひと月のあいだ申込者ゼロには、心が折れそうでしたが、2回目の事前準備会では開催できる喜びと意気込みで話し合いをすることができました。それからは、スマホで参加予定の方は「おあしすコール」へ来ていただきアプリを取り入れ、ミーティングの方法を学び、接続テストをしたり、ご自宅に訪問をしてミーティング体験、パソコン参加の方は、当事者が親の代わりに電話でやり取りしながら接続テストをして、本番を待つことに……。

わがままを通して沖縄在住家族のみで開催することになった学習会は、リーダーがホストとなってズームの操作を中心に、コリーダーも各々が共同ホストになり、分担した役割のズーム操作を、不慣れながらも進めていくことにしました。直前打合せはほとんどがリモート操作の手順確認で過ぎていき、テキストのテーマの確認の大事なところが抜けてしまいました。また残念ながら、参加者も回を重ねるごとに減っていきました。(次のページへ)

(5ページからの続き)

参加者ご自身の体調不良だったり、お仕事の関係だったり、ズームを体験してみて、障がい者就労に役立てるための研修を受けたいと途中から家族の参加ができなくなったり(当事者から感謝されましたから良かった点です)。また語り合いが未消化のままになったり、他の参加者との共感・共有できる時間が足りなかった点が特に悔やまれます。

今回の学習会では、担当者も慣れないズームを交互に操作して自信になったことでしょう。いままで遠方で参加しづらかった方々とも、自宅なり、居場所から交流できたことリモートの利点だと思いました。沖福連にはズームアカウント利用に協力していただきました。時間を心配することなく学習会を開催できたことはとてもありがたいことでした。



しかしながら、今回の学習会ではその良さを十分に感じていただくには少々不足だったかなと感じています。今後はどのようにしたらもっと多くの方々に、家族会・家族学習会を知っていただけるか、参加してもらえるようになるのかをいろいろと考えています。今後もしよろしくお祈りします。以上、振り返りながら書いてみました。反省点が多いのですが、次へのステップととらえています。

2023年2月27日

参加しての感想

私も障がい者・家族の相談を受ける立場です。

こうして親身になって語る事ができるのは同じ病を抱える家族同士だからこそ、お互いにいろいろと話せたと思います。最終日は参加できなくて残念でしたが、またどこかで会えることを楽しみにしています。そのときは声をかけてもらえると嬉しいです。

この学習会の準備等に関わった関係者のみなさん、ありがとうございました。時期遅くなりましたが、明けましておめでとうございます。

今年も家族会が楽しく過ごせるよう、期待します。

宮古島市 與那城 元子
(1月16日にいただいた感想より)

◎編集後記◎

先ごろ6冠制覇を果たした将棋の藤井聡太棋士について、キノコを食べられないとか鉄道マニアとか、午後のおやつには“ダブルドリンク”が定番であることなどは、もちろんみなさんも既にご存じの通りですが、私が特にお気に入りのエピソードは、幼少期に対局で負けたとき将棋盤に覆いかぶさって大泣きをしたというたぐいのもの。悔しさをバネにするだけの情熱が、きっと世界を変える力にもなるのだと思います。(増山)

編集：公益社団法人 沖縄県精神保健福祉会連合会
会長 山田 圭吾

〒901-1104

沖縄県島尻郡南風原町字宮平 206-1

てるしのワークセンター内

電話 098-889-4011 FAX098-888-5655

E-mail terushino@castle.ocn.ne.jp

発行：九州障害者定期刊行物協会

〒812-0068

福岡市東区社領 1 丁目 12 番 4 号

電話 092-753-9722 FAX092-753-9723

定価：10円(会費に含まれる)